京都大学防災研究所年報 第42号A 平成11年4月
Annuals of Disas. Prev. Res. Inst., Kyoto Univ., No. 42A, 1999

防災問題における資料解析研究（26）

河田恵昭・田中哮義・林　春男・北原昭男・高橋智幸

要　旨

防災研究所は，防災研究におけるわが国の中核的研究施設（Center of Excellence，略称COE）として，共同研究を推進してきている。巨大災害研究センターはその中において，自然科学と社会科学の研究を融合させる機能を有した世界で最初の研究センターとして，津波防災をはじめ，いくつかの研究課題に対して，いわゆる『メッカ』となるべく，努力を継続してきた。その一環として，米国シアトルに当センターの分室（シアトル・アネックス）を1999年4月1日から発足させるべく，努力してきた。本年はそのことを最初に紹介し，つぎに継続してきた事業を紹介することにしたい。

キーワード：データベース，自然災害科学，巨大災害，シアトル・アネックス

1. 米国の研究拠点：シアトル・アネックスの設置

1999年4月1日より，兵庫県のご協力を得て，米国・ワシントン州・シアトル市の兵庫県北米事務所内に当センターの研究拠点（シアトル・アネックス）を開設する運びになった。開設の理由は，北米地域でつぎの2つの巨大災害の発生が憂慮される中で，その被害軽減とわが国の同種の巨大災害に関する研究推進のために，米国の研究機関との継続的な共同研究が現地において必要と判断したからである。すなわち，

1）1700年1月21日午後9時半頃，北米太平洋沿岸部でマグニチュード9クラスのカスケーディア地震が発生し，それによる津波が当時の江戸および三陸沿岸に来襲したことが判明した。この地震は，過去にわかっているだけでも12回発生し，その平均繰り返し年数が約300から350年であることがわかった。したがって，現在危険域に入っており，もし発生すれば広域・巨大災害となるが，2035年頃に発生すると考えられている東海・東南海・南海地震とその津波による西日本の被害軽減のためにも共同研究を進める必要がある。

2）サンフランシスコ・ベイアリアでは，ヘイワード断層などによる地震発生の確率が高くなりつつある。もし地震が発生すれば，ベイエリア地区が都市型の地震被害を被ることになる。このベイエリアと，上町断層や中央構造線などを控えた大阪湾地域との地形的，社会的な類似性の観点から，被災様相とその危機管理方法について研究することは極めて重要と判断される。

これまでの協議により，前者については，大気海洋庁（NOAA）を窓口として，全米科学財団（NSF），危機管理庁（FEMA），地質調査所（USGS），ワシントン大学，ワシントン州政府などとの津波のメカニズムおよびその被害軽減に関して共同研究する運びになっている。また，後者についても，地震工学研究協会（EERI），危機管理庁，地質調査所，カリフォルニア州政府，サンフランシスコ，オークランド，サンノゼ各市などとの都市地震被害軽減のためのプログラムの開発に関する共同研究を推進することになっている。このシアトル・アネックスは，今後5年間を第1期として運営する予定である。

2. 研究活動の社会への還元の試み

2.1 第4回地域防災計画実務者セミナーの開催

阪神・淡路大震災を契機として，都市・地域防災では，地方自治体の防災関係職員の皆様に，地域防災のあり方をまず知っていただくことが重要であると判断された。そこで，急遽，防災研究所地域防災システム研究センター（現巨大災害研究センター）が中心となって，1995年8月に京大会館において『地域防災計画実務者セミナー」を3日間にわたって開催した。そこでは，自然災害の外力の特性を理解すること，災害対策を危機管理の立場から実施すること，およびその実例を紹介することを目的として，講演題目を組み立てた。シンポジウムの予算も乏しく，そのために講演者は，同僚，友人，知人から人選し，まさに手弁当でこのシンポジウムに協力していただいた。しかし，これらの講演者と参加者は共通の使命感に支えられ，真夏

の京都の大変ハードな日程であったにもかかわらず，大成功であった。

1998年のテーマは「風水害防災を学ぶ」である。約100名の参加者を得て，1998年5月27日（水）～29日（金）の3日間セミナーを開催した。プログラムと講師は，つぎの通りである。

第1日　自然の脅威を学ぶ

11:00　オリエンテーション「防災とは」（河田恵昭）
12:00　昼食
13:00　講義1「集中豪雨災害」（椎葉充晴）
14:00　講義2「台風災害」（京都産業大学　藤井　健）
15:00　講義3「雪害」（新潟大学　小林俊一）
16:00　講義4「地球温暖化と環境災害」（植田洋匡）

第2日　被害抑止対策を学ぶ

9:00　講義5「斜面崩壊被害」（嘉門雅史）
10:00　講義6「洪水被害」（中川　一）
11:00　講義7「沿岸・海洋被害」（高山知司）
12:00　昼食
13:00　報告1「トンネル崩壊災害への対応」（北海道開発局　高松　泰）
14:00　報告2「百石町重油漂着災害への対応」（青森県　武田志郎）
15:00　報告3「続発する災害に対する対応」（鹿児島県　中西　茂）
16:00　報告4「震災復興マニュアルの作成」（東京都　林　孝二郎）

第3日　被害軽減対策を学ぶ

9:00　講義8「風水害の危機管理」（河田恵昭）
10:00　講義9「わが国の気象予報警報の発令体制について」（大阪管区気象台　権藤光宏）
11:00　講義10「クライシス・コミュニケーション」（林　春男）
12:00　昼食
13:00　特別講義「地域防災計画の考え方・風水害編」（消防科学研究センター　日野宗門）
14:30　総括討論　（司会　河田恵昭）

なお，今回のセミナーの内容を中心として，『風水害防災の実務』（京都大学防災研究所編）として鹿島出版会から1999年秋に出版の予定である。

2.2　東海・東南海・南海地震津波研究会の継続

東海・東南海・南海地震津波研究会は1997年10月7日に発足し，2年を経過し，2冊目の報告書を印刷し配布した。2年目はわが国の津波防災に関係する9省庁のうち，建設省，運輸省，気象庁から事業の紹介を中心に話題提供をいただいた。何よりも現在の津波防災に対する国の取り組みを知ることが，研究会の出発に際して重要と考えたからである。講演の概要は報告書に収録してあるので，必要な場合には事務局に問い合わせていただくことにしている。

2.3　Memorial Conference in Kobe IV の開催

この会議の事務局は当研究センターにおかれており，その開催経費として，防災研究所の共同研究事業費と阪神・淡路大震災復興基金の補助を受けている。なお，本年は，『君たちの証言を残そうよ』として，震災当時の学童，学生諸君から作文を公募し，発表していただいた。なお，応募作品はすべてフロッピーに収録し，適宜，利用に供することになっている。プログラムなどの概要は下記の通りである。

(1) この会議の目的

兵庫県南部地震は，阪神・淡路大震災として，未曽有の被害をもたらしたが，この災害から学ぶべきことは多い。すなわち，政治，法律，経済，社会，科学，工学，医療，技術などのいろいろの分野から，この災害について語られ，様々な観点から検討もされているが，それらの共通の認識は，都市域の発展過程において，地震に対する脆弱性が増幅されてきたにもかかわらず，それらが見過ごされてきて，一挙に顕在化したのが今回の大震災であったということであろう。こうした意味において，強い直下型地震に直撃された人口の稠密な都市域がどのような欠陥を抱えているかが，わが国と世界の人びとの前に明らかにされたのである。これも私たちが得た教訓の1つである。

第二次世界大戦直後の1948年に福井地震があった。これは福井平野の直下で起こったものであるが，当時の福井市は大都市でもなく，戦災を受けてまもなくのことであったことから，その被災過程や形態はその後の各地での都市域の発展過程において参考とされることもなかった。こうして，戦後の50年は都市域の直下で強い地震が起こったときに，都市域に住み，働く人びととそれを支える社会基盤がどのような被害を被るかが明らかにされないままに，都市域の肥大化と社会構造の高度化が平行して進行した。言い替えれば，都市域が地震に対してもつ弱点が，都市化の過程においてフィードバックされないままに増幅し，都市化が進んできたのである。これは，都市化の過程で高頻度に都市水害が発生し，治水対策がその都度改善されてきた事情とは好対照である。

今回の阪神・淡路大震災のような巨大災害を経験するのは50年，100年に一回という極めて希なことであることから，他の大都市域においても近い将来同様なことが起こると考え，その対策を至急に考える必要があろう。

このように地震から私たちが学ぶべきことは多く，それぞれの分野ですでに検討や解析が行われているこ

とでもある。しかしながら，各人が自分たちの分野の人たちとのみ話し合うのではなく，いつもの仲間とは違った言葉で，異なる背景をもつ人びとと語り合うことは大変重要なことであろう。この災害のもつ多様な意味を理解するためにも，また再びこの様な惨禍を繰り返さないためにも，この語り合いの意義は大きいと考えられる。

このような観点から，1996年1月18日及び19日に神戸で Memorial Conference I を開催した。その後毎年この会議を継続し，1999年2月20日に第4回を開催した。そこでは，大震災の学術面についてのみならず，一般市民，被災者，ボランティア，自治体職員，医者，研究者，技術者，企業家などが一堂に会して，この大震災からそれぞれが学んだことを話し合い，互いに理解が足りないところを補い合うことで，こころ豊かで安全・安心な社会への再生の一歩とすることにしている。

(2) プログラム

日時：1999年2月20日（土）
場所：神戸海洋博物館
内容：
10:00～　開会の辞：新野幸次郎組織委員長
10:10～12:00「子供達が経験した阪神・淡路大震災」
小学生から大学生までの児童・生徒がみずからの震災体験を証言する。（一人当たり5分，20証言）
12:00～13:00　昼食
3:00～14:45 「21世紀を担う子どもたちに何を残すのか」　教育の専門家による震災の子どもへの影響についてのシンポジウム
コーディネーター：木下冨雄（甲子園大学学長）
パネリスト：
「相談活動をとおして」岩本しず子
（神戸市立青少年センター東教育相談所主任相談員）
「遊びをとおして」森山隆一
（関学学習指導会代表）
「演劇をとおして」浅岡輝喜
（神戸シアターワークス事務局長）
「音楽をとおして」林せつ
（ニューフィルハーモニー・ジュニアオーケストラ代表音楽監督）
14:45～15:15　ニューフィルハーモニー・ジュニアオーケストラ演奏会　指揮 武田博之
15:15～16:30 「震災4年目のまとめと提案」
コーディネーター：土岐憲三
（京都大学工学研究科長）
パネリスト：当日の話題提供者全員

(3) 成果のまとめ

「メモリアル・カンファレンス・イン・神戸Ⅳ」は，1999年2月20日（土）の午前10時から午後4時30分まで，神戸海洋博物館大ホールで開催した。会場には文部省をはじめ全国の教育委員会関係者などを含むおよそ300名の出席があった。会議は3部構成であった。まず，午前中はテーマセッション「君たちの証言を残そうよ」（4年前，君たちは阪神・淡路大震災を経験しました。そのときのこと，それからの4年間のこと，君たちがこの震災で感じたこと，学んだことを，世界の子供たちや，これから生まれてくる21世紀の子供たちのために，証言として残そうよ…）では，応募作品870編から選考した27編の証言について応募者から発表いただいた。発表風景は，NHK をはじめ在阪の民間テレビ局及び新聞のほぼすべての取材対象となり，当日のテレビニュースや夕刊の記事となって，全国に報道された。午後はまず，パネルディスカッション1「21世紀を担うこどもたちに何を残すのか」を実施した。コーディネーターは甲子園大学長の木下富雄，パネリストは教育界，ボランティア，音楽界，演劇界からの代表4人であった。内容は震災で傷ついた子供たちのこころをどのように癒すのかということを中心に，各界の取り組みと課題が紹介され，意見交換が行われた。最後のパネルディスカッション2「震災4年のまとめと提言」では，京都大学工学研究科長の土岐憲三をコーディネーターとし，本日の話題提供者をパネリストとして，提言のまとめを行い，会議を終了した。

今回の試みは，震災後はじめて，震災当時の小学生から大学生までの震災体験についての貴重な証言を発表する機会となった。また，応募のあった870編の証言すべてを CD ロム化して永久保存し，関係者に配布することになった。京都大学防災研究所では，阪神・淡路大震災の発生から復興の完了までを継続的に観察し，その知見を体系化して，防災学の確立に寄与することになっている。その意味で，次代を担う子供たちが震災で何を感じ，どのような問題意識をもったかを知ることは，災害にねばり強い市民社会の構築に関して，極めて重要な情報を提供し，かつ防災学の内容をより総合化することに役立つと考えられる。また，これらの情報を災害研究者のみならず，被災者，ボランティア，NGO（非政府組織），行政関係者，医療関係者，技術者，企業関係者，教育関係者が共有し，分野を超えて相互理解の深化を図るこの会議の目的が，一層具体的な事例を通して明確となり，その目指す方向の関係者間の合意に貢献することにつながるであろう。また，このことによって，安全・安心で心豊かな社会づくりに向けての大きな社会的意思の形成にも役立つと信じられる。

この会議では，つぎのような Memorial Conference in Kobe IV からの提言が採択された。

「メモリアルコンファレンス イン Kobe IV」は，1999年2月20日。神戸海洋博物館大ホールで会場にあふれるばかりの参加者をえて開催された。これまでのメモリアルコンファレンスでは，震災を契機とした諸学会の活動，防災の進展，復興の様子をとりあげてきた。それを通してこの災害が持つ多様な側面について学び，震災について正しく理解し，再びこのような災害を繰り返さないためにも，異なる背景をもつ人々と語り合うことは大変重要であると考えてきた。

今年のメモリアルコンファレンスでは，子どもと震災の関わりを全体のテーマとしてとりあげた。午前中の会議では，子どもたち自身が自らの震災体験を自分自身の言葉で証言した。(財) 阪神・淡路大震災記念協会，兵庫県教育委員会，大阪府教育委員会の後援をえて実施した「君たちの証言を残そうよ」という呼びかけにこたえてくれた総計870編の証言の中から，できるだけ多くの人に聞いて欲しいと思った26編の証言が朗読された。そのすばらしさに会場の人々は感動した。午後のパネルディスカッションでは「21世紀を担うこどもたちに何を残すのか」をテーマに，相談活動を通して，遊びを通して，演劇を通して，音楽を通して子どもとの関わりを実践してきた方々の活動が報告された。ニューフィルハーモニー・ジュニア・オーケストラの子どもたちのすばらしい演奏が披露された。また，展示会場ではさまざまな団体の試みが展示された。

今年の会議からえられた教訓は次のとおりである。すなわち，

1）子どもたちの言葉は誠実で，重く，鋭かった。どう対応すればいいか分からないほど感動した。

2）震災を体験しないものにとっては震災体験は風化する。しかし，震災を体験した人に体験の風化はない。

3）光景，音，におい，寒さ，暖かさ，震災についての鮮明な記憶は当時5歳の子どもも持っている。そして記憶の鮮明さは50年を経てもなおあせない。

4）子どもたちは決して弱い存在ではなく，しっかりと現実を見つめ，人の温かさに感謝し，人の役に立つことを決心していた。

5）子どもたちには勇気があり，「失ったもの」を悲しむだけでなく，震災の経験を通して「得たもの」は何かと問うていた。

6）震災は子どもたちの心に大きな傷を残した。その傷跡は消えにくいが，その傷をいやすさまざまな試みが，家族，友だちをはじめさまざまな場で，子ども自身も，子どもと向き合う人々の間で行われている。

7）子どもは簡単には心を開かない。しかし，分かろうとする努力は子どもたちにも伝わる。

8）震災の体験は現在の公教育では教えない。多くの人生の真実を教えてくれた。

9）言葉では表現しきれないもどかしさもある。音楽が表現するものもある。今後もできるだけ幅広く，さまざまな形で証言を残していかなければならない。

10）子どもも自分たちの経験や震災を通して得たものを人に伝えたがっている。大人はその場を用意しなければならない。

最後に，来年の「メモリアルコンファレンス イン Kobe V」は神戸と東京で開催する。神戸では2000年1月22日（土曜日）に今年と同じく神戸海洋博物館で開催する。来年もご参加いただき，1年間の復興を見守っていただきたい。東京では，2000年1月17・18日に，阪神・淡路大震災を済んだこととして忘れるのではなく，忘れてはいけないことを整理して，被災地外の人々に伝える。

(4) 26の証言

1）家族っていいなあ——本山南中学校　2年1組45番　藤田　佳奈

「ドン。グラグラ。」一瞬だった。たった一瞬で私の家は傾いてしまった。私のおなかの上にもタンスが落ちてきた。でも，その時お父さんが私の上にかぶさってくれた。そのおかげで私は助かった。それにしても，私は運がよかった。なぜなら，丁度その前日，私はスケートで転んで右手を骨折していた。寝相が悪い私が，右手をできるだけ動かさないように，お父さんが，一緒に寝ていてくれていたのだ。だから，とっさにお父さんが，かぶさってかわりにタンスを背中で受け止めてくれたのだ。この時私は，とってもうれしかった。家族っていいなあ，と思った。もしあのタンスが私のおなかに落ちていたらと思うと，私はお父さんに感謝しなければならない。

それはわかっている，わかっているけど，実行にうつせない…。

私は，地震から三日後，もうすでに，疎開していた。親戚の家ではなく，お父さんの知り合いの家へ…。私たった1人で。とてもさみしかったし，家族も恋しかった。でも，今から思うと私はとても恵まれていた。小学校の友達も，先生もすごく優しかったし，気をつかってくれた。疎開先のおじさんやおばさん，お姉ちゃんも色々お世話してくれた。右手が使えない私の着替えを手伝ってくれたおばさん。一緒に学校に行ってくれたお姉ちゃん。今思えば，みんな本当の家族のように接してくれた。お別れの日は，涙が出てきそうなほどつらかった。でも，家に戻れるのは，とてもうれしかった。家に戻れるといっても，おじいちゃんの家だったけれど…。でも，お父さんと一緒に住めるということでうれしかった。地震の時，お父さんに助けてもらったような命だったから。

しかし，今の私は，お父さんに反抗してばっかり。感謝を，体で表現しようと思ってもなんだか恥ずかしくて，ついつい反抗してしまう甘えん坊の私。でも，地震前の家に戻ったら，反抗しないようにするから。

それまでは甘えん坊の私でいさせてね。

地震。それは，予期せぬ出来事だった。あの恐ろしい地震。忘れてはならない出来事だと思う。それはとても恐かったけれど，その分友達も多くなった。家族の大切さや助け合う事の大切さを学んだ。地震。どんなに大事な事を学べても，やっぱりもう二度と起こってほしくないことである。でも，家族っていいなあ。

2）震災――尼崎市立武庫小学校　6年2組　森田進之介

ぼくは，震災の作文を何回もなぜ書くのか，不思議です。ぼくは，震災直後の時のことを，知っているのでもう書かない方がいいと思います。でも書く理由を考えてみました。

今，神戸，芦屋，西宮，尼崎では仮設住宅に住んでいる人がたくさんいます。ぼくは，その仮設住宅の事をレポートに書きます。その中に，お年老りの人は，お金が手に入らなくて，移転もできないので仮設住宅にずっといたままです。そのお年老りの人をなんとかして助けてあげたいです。ぼ金やチラシを配って全国の人にどんなに苦しんでいるのかを教えてあげたいです。その全国の人と協力して国にうったえたいです。武庫地区では，すさのう神社では，とりいの前の彫刻がたおれて，こわれたままです。マンションにもひびを直した場所が目立っています。今，商店街のアーケードがとりこわされています。新しいアーケードをとりつけようとしています。別にとりこわさなくてもいいと思います。こわれてもなかったし，震災にもたおれてなかったのでじょうぶだったと思います。そんなことにお金を使うんだったらひ害者にあげた方がいいと思います。人は，冷たいと思います。他人の気持ちの一部も知らなくて自分たちがよかったらいいというふうな気持ちがたくさんあるからいけないと思います。

天災は，こわいです。地震，台風，たつまき，かみなりなどいろいろあります。台風は，水をたくわえるために必要だけど，ときには，家をこわしたり，車をひっくりかえしたりしてすごい力を持っています。地震，たつまき，かみなりは，ひ害にあうと死んでしまうかもしれません。

もっと多くの人がひ害にあった人の心を知ってあげることが必要だと思います。

3）震災をのりこえて――神戸市立本山南中学校　1年6組49番　藤井　舞

4年前の1月17日5時47分，ものすごい揺れで目を覚ましました。ふとんと一緒に部屋の中をまるで，フライパンの中のいためものの様に，飛び跳ねていました。その時間は，とても長く，なにがなんだかわかりませんでした。兄が「これは，地震だ！」と叫びました。まっ暗闇の中で，母が「たいへんなことがおきたのだから，今日は，学校はないから明るくなるまで，動かないでふとんの中で，じっとしていよう。」と言いました。

父は「外の様子を見てくる。」と言って，出て行きました。私達3人は，まっ暗で，しんとした静けさの中を朝が来るのをじっと待ちました。

夜が明けて，部屋の中を見渡すと，めちゃっくちゃに壊れて，歩けない状態でした。

近所の人達が，本山第3小学校に避難し始めましたが，わが家は，3人共インフルエンザで，高熱のため，外に出られませんでした。

ふとんの中で，ラジオを聞いていると，友達の名前が流れてきました。

いつも一緒に遊んでいたのに，信じられませんでした。その子は，お父さんと，お姉さんと共になくなりました。

町も家も壊れて，心も壊れてしまった様でした。

食べる物もなく，また何も，のどを通りませんでした。

寝ていても余震がずっと続いて，またひどい地震が来るのではないかと，いつも緊張して，とても恐かったです。そして，とても寒かったです。恐すぎて泣くこともできませんでした。

近所で，火が燃えても消防車もこないし，埋もれた人がいても救急車も来ません。私達は，見捨てられた気がしました。

お父さんが，近所で埋もれた人を助けに行きました。道具がないので皆で，手でほりかえしたそうです。親子が無事に顔を出した時は，皆喜んだそうです。でも，まだ近所に倒れた建物の下じきのままの人達が沢山いました。

私は，地震の時の事は，思い出したくないです。あの嫌な思いは，二度としたくないのです。この作文を書く事で，又，つらい日々の事を思い出してきっと暗い暗い気持ちになりました。皆，地震からずっと暗い気持ちを心のどこかに持ち続けていると思います。

自然を壊すと，きっとよくない事が起こる気がします。自然を大切に，命を大切にして生きていきたいと思います。

4）私にとっての阪神大震災――神戸市立本山南中学校　1年2組33番　王　愛理

1995年1月17日午前5時46分に発生した大震災。何もかもが私にとって初体験だった。わすが数十秒の間に自分の身の周りや生活環境が一変した。

崩れた家の中，へしゃげた窓と網戸のわずかな隙間から母親にひきずりだされ，屋根づたいに逃げて，かろうじて道路に飛び降りる事ができた。裸足のままで……。その時父は，まだ倒れた家具の下じきで足だけが見えていた。父が下じきになり支えてくれたので屋根が私のベッドを押しつぶす事はなかった。

通りすがりの人や，となりの人が危険を省みず，ガレキの中に飛び込み，必死の思いで父を助けだしてくれた。

フラフラと出てきた父を見た時，思わず私は泣き出して膝がガクガクして座り込んでしまった。

全壊した家を後に，着のみ着のまま，避難した。

避難所で私は，人の優しさ，温かさ，思いやりという事を教わった。

自分の家も大変な中で夜中におにぎりを届けてくれた友達。被災者が寒い思いをしているだろうと思って徹夜で肩かけを編んで送ってくれた奈良県立郡山高校のお姉さん。不審者が多発するから，夜も寝ずに避難所の見回りを続けてくれたお兄さん。たった1台の軽トラックで2千人分のたこ焼きを一晩中焼いてくれた屋台のおじさん。たくさんの人の善意に支えられて，それまでは恐怖で笑う事さえ忘れていた私も少しずつ立ち直る事ができた。この事は，地震という体験がないと一生気付く事なく，ただ漠然と日々を過ごしていたと思う。

将来私はこの体験をいかして，ボランティア関係の仕事につきたいと思っている。今はまだ具体的に考えてないけど，人の役にたてるようになりたいと思う。

5）金木犀と共に――西島和宏　飛松中学校当時1年

ぼくの家の庭には，一本の金木犀があります。この金木犀は，ぼくが生まれる十何年も前から立っているそうです。最近は，あまり虫や鳥も来なくなりましたが，昔はよく，セミやいろいろな鳥が，金木犀に集まってきました。

祖母が言うには，この金木犀は買ってきた時，足もとぐらいの苗木だったそうです。この話を聞くまでは，ぼくはあまり金木犀に興味がありませんでした。毎日見ているせいか，成長しているのがあまりはっきりわからないくらいでした。でも，たった二十年ちょっとで家と同じ高さにまで成長したことを考えると，植物が成長するのはとても早いものだということを知らされたような気がします。そして，今もぼくが成長すると共に金木犀も少しずつ成長しているのだということがわかりました。

この金木犀は九月の末ごろに花を咲かせ，いい香りを放ちます。もうすぐ，この金木犀の美しい花を見たり，花のいい香りをかいだりすることができると思えば，秋が待ち遠しくなってきます。

この金木犀は，ぼくが生まれた時から十二年間，ずっと見守ってくれていたように思います。それを，今ごろ気づくというのは，少しはずかしい気がしますが，気づいてよかったと思います。もし，金木犀がただ立っているだけではなく，ぼくと共に成長しているということを気づかなければ，ぼくは金木犀のことを気にもかけずに大人になり，そのままこの世を去っていたと思います。それは，とても寂しいことです。なぜなら，この世を去る時，思い出の中に金木犀がないのですから。

ぼくが大人になり，悲しい時うれしい時，折にふれて，この金木犀と共に成長していったことを，思い出せるような気がします。

6）あの大震災を体験して――神戸市立本山南中学校1年4組49番　山田　有紗

私は，4年前にあの阪神・淡路大震災を体験しました。4年前，私は小学3年生でした。だから，小学3年生の思い出はどんな事よりも震災の事が私の心には強く焼きついているような気がします。

地震がおこった時，私はマンションに住んでいました。そして私の部屋にはたくさんの重い家具が置いてあったので，本当なら下じきになっていてもおかしくはないのに，その時は運が良かったのか，私のまわりにはいろいろな物が積み上がっていたので，幸い私はケガ一つしないで，無傷で済みました。

私は，この地震で生まれて初めて見るもおぞましい景色を見ました。家の中はもちろん外は昨日建っていた家がガレキの山になっていて，道路には血を流したまま横たわって毛布をかぶっている人がたくさんいましたし，道路そのものは波打っているような状態でした。その時は，私は地震という事は分かっていたけれど，心の隅では「学校に行かなくてもいいのかな」と思っていましたが，父や母には訊ねませんでした。

そのあと，給水車が来たと近所の人から聞いたので，母と二人で近くの公園まで行きました。いつも通っていた道がガレキなどで埋められた姿を見ながら通るのはとても恐ろしかったです。

この震災で私は，家族だけでなく近所の人とも協力する大切さを学びました。隣の人が頭をケガしていたので救急箱を持ってきて母が手当をした時に，隣の人の笑顔が私はとてもうれしかったです。また，祖父や祖母の家は1階がつぶれたけれど二人とも無事だと父から聞いて安心しました。その後，祖母たちと祖母の家に行った時に，知らない人がその人にとっても知らない人である私に，お湯を飲ませてくれました。その時，とても寒かった私は，体だけでなく，心も温まるような気がしました。

それから三日後，私は兵庫県養父群の私のおばの夫の田舎に避難しました。向こうの人はとても親切に私たちをもてなしてくれました。それに，向こうで通った熊次小学校は，田舎の民宿から2km 雪の中を歩き続けなければいけない所でした。その学校は全校約80人で，学年1クラス12人でした。女子9人，男子3人のクラスで私は受け入れてもらえるかとても不安でした。なにしろ転校なんて初めての事だったので，すごく緊張していました。でも，熊次小学校の3年生の人たちはとても優しく私に接してくれたので，あっというまに私はクラスの一員になる事ができました。先生

もとても親切にしてくれました。

私がこの地震を体験して学んだ事，それは，人は本当に危険になった時，互いに助け合うという優しさを持っているという事です。そして，地震は「忘れたころにやってくる」という事です。なにしろ，地震の前日，父と母が，

「懐中電灯の電池を取りかえておかないと。もしかしたらそろそろ神戸にも地震が来るかもしれないから。」と言っていた翌日に阪神・淡路大震災は起きたのですから。

7）阪神大震災で体験したこと――神戸市立飛松中学校　3年　梅実　美希

私は，今だから言えることだけど，自分自身にとってこの出来事はあって良かったんではないかと思えるぐらい，貴重な体験をしました。もしこの震災がなければ，私は今ほど家族や友達がどんなに大切な存在かなんて考えてなかったと思います。でも，地震は本当に恐くて，これからの人生においても二度と経験できないぐらいの恐さでした。普段の生活からは地震なんてまったく縁がないものだと思っていたら，それを思い知らせるかのようにこの出来事はおこった。ドーンッという音と自分の体が宙に浮いたときに目が覚めました。何が何だか分からないまま外に出たら，まるでそこは地獄と言ってもいいほどの見たことのない世界でした。私は，一刻も早くここから逃げだしたいと思いました。生活に必要なガス・電気・水はすべてなくなって，3日後鳥取のいなかへ帰ることになってしまい，神戸の友達がすごく心配だったけれどそのときは本当にどうしようもなく神戸を離れました。あっという間に一週間が過ぎ，私は鳥取の小学校に仮入学することになりました。知らない人ばっかりで，そのうえ言葉使いが違う所なんて絶対に嫌だと思ってばかりでした。そんな気持ちで学校へ行くと，みんながのぞいて来て，恥かしくて下を向いたまま顔をあげれなく，不安でいっぱいでした。でも，教室に入ったんパンッと聞こえたのでびっくりして見ると，なんと黒板には私への歓迎の言葉がかかれてあって，クラッカーまでみんなが用意してくれていたのです。その瞬間私の不安な気持ちはどこかへふっとんで，ただうれしいだけでした。それだけでなく，休み時間にはみんなから話しかけてくれて，心配していた自分がバカらしくなりました。始めは気を遣ってくれているのかなと思ったけれど，話しているうちにすぐに打ちとけることができました。嫌な気持ちなんて，もうその日のうちに心の中からすっかり消えてしまっていました。学校にも慣れてきて親友と呼べるような友達もできました。私は，今までそんな風に人に親切にされたことがなかったから，うれしさは言葉で言い表せないぐらい大きかったです。鳥取のみんなが暖かく接してくれたから，一日も休まずに元気に学校へ通うことができたのだと思います。最後に，もう一つ考えさせられたことがあります。それは親の大切さです。友達にも恵まれて，これ以上楽しいことはないと思える学校生活だったけれど，その間ずっとお父さんお母さんと離れていました。普段はしょっ中うっとおしいとか思っても，いざとなるとすごくさみしくて，おじいちゃんやおばあちゃんにやつ当たりすることもありました。ご飯を食べていると勝手に涙が出てきて止まらなかったので，驚いたのを覚えています。その時に初めて，親がいるという事のありがたさが分かりました。いつも一緒にいたからそれが当たり前のようになっていたんだなあと深く実感することができました。とてもつらい震災だったけど，この震災がなければ人の優しさとかも分からなかったと思うし，今まで以上に大切にしたいと思いました。困った時に助けてもらった時のあのうれしかった気持ちを忘れずに，もし困った人がいれば自分から声をかけてあげるという思いやりを持って行動したいです。こんなにいろんな経験ができ，考えることが出来た震災は，私にとって生まれて初めての大きな出来事でした。

8）まけるもんか――五位の池小学校　4年　山本理紗

「グラグラ。」このゆれで阪神大震災は始まった。私はその時5才でした。目がさめると，私の顔の上には，タンスの上の人形がおちてきていました。お父さんに足をふまれ目がさめて，ふとんをとられました。私はまだ小さかったので，「なにがあったんやろ。」と心の中でつぶやきました。お母さんのねていた所は，人形ケースがいまにも落ちそうでした。

6時ごろに，しっているおじいちゃんが，「理紗ちゃんだいじょうぶやったか。」とかけつけてきてくれました。私の部屋は，本だなから本がとびだしていただけでよかったけど，もう一つの部屋は，時計がわれたりしていました。台所は，たくさんの食器がわれ，足のふみばなどありませんでした。そんな大さわぎなのに弟は，なかなか起きませんでした。その日は，とても家にいれそうになかったので，あまりひ害をうけなかったコープの村のマンションのお母さんの友達の家にとまりました。

それから1ヵ月ほどおばあちゃんの姉の家にいて，それからいとこの家にとまりました。

いとこの家にいると，朝早くから起こされて，毎朝おなかの上にのられていました。2月ごろになると，自分の家に帰ってようち園にも行くようになりました。

でもガスつかないし，水はでてきません。

だからときどき給水車がきてくれて，ようち園にいく前にバケツに入れたりして水をおフロにためました。弟は役にたちません。ペットボトル1本も一人でもちません。だから私は弟の分まで全部もちました。

ずーっと不便が続いて，2月も半分ぐらいにいった時やっとガスがつきました。3月になると水もでてきてふつうのくらしができるようになりました。

私が1年生になった時は，阪神大震災でひ害をうけたので，入学式の時に，お道具バコ，色えんぴつ，ノート，えんぴつとかいろいろもらいました。

それからちょっとたって，ひ害をたくさんうけた板宿に行って焼けた所を見に行きました。とてもたくさんの所が焼けて，はいがヒラヒラとんでいました。

おばあちゃんの家のちかくは，家がかたむいていたり，アパートの2階が1階になって，1階は地面にうめつけられていたりしました。

今は，ふつうにくらしていけても地しんはいつくるか分かりません。私はいつも，とてもこわくてなかなかねつけません。

だからもう地しんなんて，きてほしくないです。これから地しんがきても地しんになんか「まけるもんか。」

9）ふるえがとまらない——高木小学校　3年1組　淨関　養子

急に地鳴りがして，はげしくゆれた。

ねている所には，母のタンスがあったので，父が首にけがをした。でも，がまんし，下に下り出ようとしたが，げんかんでかっていた魚が死んでいて，水ももれていて，くつがびしょぬれだった。母は急いで上ぐつを出し，上着も出して外に出た。

ななめ前の家はドアがあかなくて，みんなでドアをあけた。

かわら木中学校にひなんし，トイレも行って，ふと見ると，大きな百しょう家がこわれていたので，ますますふるえてきた。私は，兄のジャンパーを何枚も着ていた。

家に帰ると電話があり，おばあちゃんちへ車でひなんした。おばあちゃんちは，さらが少しわれたぐらいでびくともしなかったけど，まわりの家，本通りは，つぶれていた。

母たちは，家にある物をとってくるといい，私はあずけられた。急いで食べ物を買いに行くと，店の中は，人でいっぱいだった。思うだけでふるえた。

その後いとこたちも来て，応接間，3階，1階とねた。時に，父が水をもって帰ってきたり，兄がもらいにいったりした。

いろんな人が，水のいらないシャンプーをくれたり，ウェットティッシュをくれたり，おさがりをくれたりした。

いつも余震があるたび，ふるえていた。食べ物もろくになく，カップラーメンか，たまにおにぎりがあった。

いつも，母たちは，家に物をとりに行った。子どもたちはいつも留守番で，いつ余震があるか，こわくてかたまっていた。少し音があると，こわくてびくびくふるえていた。母が帰ってくると安心だった。

幼稚園にいくのも学校にいくようになっても泣いていた。送りむかえも大変で，母はつかれていた。父は首のけがをなおしておらうため，となりの接こつ院に行っていた。

けがはなおったけれど，家はたたないので，まだ，元の場所でくらせない。いとこたちが帰っても，私たちはずっといた。

その間でも，余震はあった。兄が友だちを呼ぶたび安心した。そうすれば，遊んでくれて，こわいこともこわくないほどうれしかった。

でも，余震はおさまらず，幼稚園へ通っているとすぐ泣いた。泣かないと先生とも約束した。先生は，母といっしょにいさせてくれることもあった。

こわれた家で，ごはんを食べたこともあった。

地震なんてなければよかったのにと何度も思った。

でも今は，食べ物にも困らないし，友だちもたくさんできたから，地震に負けずにがんばる。

10）震災をとうして感じたこと——神戸市立鷹取中学校　3年　吉田　恵

震災から四年たち，町もだんだん復興してきています。震災当時は，焼け野原だった長田区鷹取商店街も，だいぶ店がたってきました。

私は，この震災で人のあたたかさや，やさしさを学びました。近所のおばちゃんにパンをもらった時は，本当にうれしかったです又，鷹取中学校へ，食べ物をもらいに来た時に，やさしくしてくれた，生徒には，感動しました。受験勉強がたいへんなのにと，小5ながらにも，かんしんしたことを覚えています。それで私にも何かできないかと思い，先生に相談して，「かたたたき」をしてまわることにしました。勇気がとてもいりました。でもみんな喜んでくれて，お金や，お菓子などを，くれようとした人もいました。ボランティアといっても，いろんなことが，できるんだなあと，思いました。食料などをくばるだけが，ボランティアではなく，心をいやすボランティアもあると知りました。

今，震災の住宅にはいったけど毎日さびしい思いをしている人がいると聞くたびに心がいたみます。住みなれたところを，はなれるのは，とてもつらいと思います。それに一人暮らしの人は，孤独というものがまっています。私は，お年よりが高層住宅に住むのはたいへんなことだと思います。私のおばあちゃんも，エレベータにのれません。そういう人もたくさんいると思います。だから，もっとそういう面もみてほしいです。一つ一つ部屋をくぎらなくてもいいと私も思います。みんなが協力して暮らしていく住宅を作ったらいいと思います。そしたら「孤独死」もふせげると思ます。

11) 4年前の感謝の気持ち——神戸市立本山南中学校 2年4組40番　田中　久美

4年前，私は初めて地震・震災というものを知り，実際に経験した。怖かった。怖いというたった一言の言葉をいうだけでも，心臓がバクバク言い，このままひょっとしたら死んじゃうんじゃないかと思った。世間の人が気がるに言う，本当にジェットコースターに乗っている様に家が揺れた。いっぱい揺れて，家中の物，たんす，机，テレビなど数々の物が飛ぶ様にたおれた。停電して，どこを見ても明りなどなかった。進むべき方向の道といえば，誰か人の声のする場所しかなかった。その中，私たち家族4人は無事に外に出ることができた。でもそこは戦場の様にあれはてている所だった。木造の建て物，電柱，全てが横だおれになっていた。アスファルトの道も，ものすごく深い亀裂がはいっていて，道を歩くのも足元が恐くて，まともに歩けなかった。その中，母はあわてて外に出てきて上着がとれなかった私と姉のために，一旦家にもどりジャンパーを取って来てくれた。その時は恐さのあまり何とも思わなかったけど今思うと，全てのことに対してうれしくて，感謝をしている。同じマンションの人が玄関をひっしにたたいて助けに来てくれた事，家族の誰よりもさきに，一番年下の私を家から出してくれた事…。本当に感謝している。

それから私と姉は小学校に避難した。その途中，私は泣きそうなくらいにしょっくな事を見てしまった。それは私の一番の友達の家が跡形もなくつぶれていた。信じられなかった。家から避難所まではだいたい5分もあればじゅうぶんに行けるのに，何10分，何時間もの長さに感じられた気がする。だって，もし友達にまんがいちの事がと考えれば，ものすごく不安になってしまった。でもその友達とは今もずっと仲良くしている。

その日から3日後，私の家は避難所の学校の廊下で寝ていたので，食事もろくにできずに体の調子をくずしカゼをひき，熱を出してしまった。でもその日にたまたま避難所に医者が来てくれて，病気の人やケガをしている人の手当てをしてくれた。そこにはものすごい行列ができた。私もそこに並んだ。でも薬などはいっさいもらえず，ノドのはれが少しでもましになる様にイソジンをノドにメンボウでぬるだけだった。このまま避難所にいても寒いだけなので，私は家に帰って寝る事になった。寝るのは恐かったけどこの3日，ほんの数時間しか寝ていなかった私は寝ぶそくのせいであっさり寝てしまった。そこでしばらくして私が起きると，父や近所の人たちが私に少しでも栄養がつくように食べものを少しだけだけれどくれた。それからしばらくたった日，私は友達と毎朝配給を配ったりして自ら，ボランティアを手伝った。

でも，地震という物はものすごく恐い物だが，そこからはいい経験を得たと思う。

12)「私たちの深い傷」——神戸市立本山南中学校 1年6組　林　智子

ゴゴゴゴゴーッ。それは，午前5時の出来事でした。床は，ベニヤ板を左右上下に激しく動かしたみたいでした。何が何だかわからなかった私は，とにかくふとんを頭にがぶって自分の身を守りました。揺れがおさまってから，玄関にむかって家の中を歩いていたら，足元に何か箱のような物がいっぱい落ちていたので，私は「あれ？何でこんなにダンボールが落ちているの？」と不思議に思いました。後で気づいたらそれは，ダンボールではなく，タンス2個が横倒れになっていました。

それから，家を出たら，近所の人のざわざわとした声や小さな子供の泣き声。学校の近くを歩くと，道路はまるで稲妻が走ったように真ん中の部分が割れていたり，おばさんが消防士さんに「助けてください。」と悲しそうな顔をして頼んでいました。私は寒さと恐れのあまり，何も言わずに，ただ母と父の後について歩いていました。

その日は結局，学校にとまることになって，ガス，電気，水の無い生活が始まりました。運動場には，配給に並んでいる人やテントや車でいっぱいでした。

その日の夜，教室で寝ていた時，たびたびガラガラッ「○○さんはいますか？」と戸を開けるたび，その音に反応して地震がきたと思って，なかなか眠れませんでした。その日からでしょうか，いろいろと音にびん感になったのは。

次の日は，3時間も歩き続けました。ちょうど，東灘区から三宮ぐらいの距離でした。足がぱんぱんになっても，ずっと下をむきながらもくもくと，私は歩いていました。あまりにもひどい町の姿を見て，少し泣きそうになった時もありました。何でこんなことをしているのだろう？いつになったら着くのだろうか。「足が痛い。」という言葉は，着くまで全然口にすることはありませんでした。

でも，よく思う。「もしかしたら，私，死んでたかもしれなかった。」そう思いながら，3年生は終わり，4年生，5年生……と少しずつ震災の時の記憶がうすれていっている。でも，それは単に忘れているのではなく，心が怖い記憶からのがれたいために忘れようとしているのだと思います。

13) 私の証言——長谷川　光子

現在63才の私が，どうしても投稿したかったのは，半世紀前昭和21年6月28日福井の地震で，丸岡町の自宅を焼失し，多くの先生，友人を失いそして，大阪であの激しい揺れを感じた時，あ，全く同じだと思ったからです。ただ，違うのは，夕方と早朝，夏と冬の違いです。

福井地震の時，私は中学２年で，６，３，３制になって２年目，私達の学校が，第１期生でした。戦後教科書も全部変り，先生方も大変だった事でしょう。丁度その頃理科で，宇宙を習っていて，地球から月へ行くには，「生れたばかりの赤ん坊が飛行機に乗ったとしても，80年はかかる」と例えられたこと。宇宙から見た地球はホコリの様なもの。そして地球は太陽の周りをぐるぐる廻っていて，引力でささえられている等，当時としては神話のような授業でした。そんな時，夕方下校途中，北の方の空が真っ暗くなり，ゴーという音と共に上下にドンと動き，あっという間に家はつぶれ，砂煙が舞い上がり，それから横揺れに激しく揺れ，とても長く感じたのを鮮明におぼえている。手さげは２米程飛んで行き，体はこけたまま立つ事も出来ない。一瞬ああ地球の引力が切れたんだ，と思った。揺れが止まった時，家々から親が子を，子が親を呼ぶ声。私は一目散に我が家の方に向かったが，家々が道路をふさぎ，地面は大きく割れ，穴だらけ。家の近くで５才下の妹と会って，母と弟は畑に行ったと聞き，又，引き返し，家族皆無事と解った時は，薄暗くなっていた。（父は出征中で後に公報が入って死亡。）まもなく銭湯から火の手があがり，下になっている人達が「助けて，助けて」と叫ぶ声が今も耳から離れない。大人達も助けに行くが，大きな柱が，胸や足にかかり，のこぎりは無いかと叫ぶがどうすることも出来ない。火の手がだんだん近くなって，「助けて！！」の声も聞こえなくなっていった。本当に生き地獄そのものでした。

駅前にたった一つあった映画館に，折り重なるような焼死体を見た時，戦争中はいつも死と直面していたのか，余り恐ろしくなかった様に思う。あの当時でも，3000人余の命が失われ，未だに行方不明の人もいる。今の様にテレビも，ラジオも発達してなく，報道も少なく，長い間，焼死体もそのままだった様に思う。ただ，アメリカからのララ物資で衣類を多少もらった。

今，日本は平和な時代だけれど，地球上絶対安全地帯って無いと思う。いつ天災が来るかわからない。誰をうらむことも出来ない。

体験した子供達，大人達，きっと体験しない人達より強く生きると思う。

14)「阪神淡路大震災」を体験して――神戸市立本山南中学校　２年４組44番　中塚　理枝子

忘れもしない。1995年１月17日のこと。いきなり揺れている。私は，なぜか，一瞬だけ，呆然と立ちすくんでいた。お母さんの寝ている頭の方に机が倒れていった。ストーブも倒れて消えた。もういったい何が起こっているのか分からない。お父さんが横の部屋から大声で私達，家族の名前を読んでいた。「だいじょうぶか。だいじょうぶか。」と。真っ暗で何もよく分からない。すごい恐怖感と，不安感がこみ上げてきた。階段で下におりる時も，いつもとちがう感覚だった。じゃりじゃりと，寒くて，とても痛かった。靴もはかずに飛び出した。近所の家や向かいの家なんか，もう３階が２階と合体して押しつぶされた状態になっていたような気がする。隣の家の人の娘さんが家の下敷きになっていたらしく私のお父さんは，必死に上のがれきを，のけようとしていた。私は，その姿を，見てお父さんが危ないと，思った。いつ，また，がれきの山が，変なように崩れてきて，お父さんまで下敷きになるのじゃないかと。私は，「お父さん危ないからやめて。」と，ずっと泣きながら叫んだ。それからいつの間にか，近くの道路に出ていた。通りすがりの人に靴をもらった。冷えた寒い足が暖かくなった。どの道からどのように行ったのか覚えていないけどいつしか公園で，へたりこんでいた。たくさんの人がいた。その時も何が起きたのかもうこの時から，揺れていた時の記憶がうすれて忘れかけていってたにちがいない。それだけに不安感と恐怖感が大きかったからだ。でも記憶は，うすれていっているけど，なぜか，忘れもしていない。そうでは，なくて忘れては，いけないからかもしれない。どんなに，辛くて悲しくても大人になってまた次の世代に「昔，こんなことがあったんだよ。」って言ってあげなきゃいけない。

あの地震のせいで，楽しく平和にくらしていたのにめちゃくちゃになってしまった。やりたいことだってたくさんあったのに，それが，こわれてしまった。本当に悲しかった。だから，よけいに忘れては，いけない。多くの犠牲者が，出た。遠くへ引っ越してしまった人たちがいた。でも，「これからも勇気を出してがんばろう。」！！

15)「悲しさよりも驚き」――駿台予備学校神戸校午前部国公立文科系大学受験科　藤井　将

当時私は深江南町に住んでいた。六甲道にある父方の実家が火事になり，祖父は全身大ヤケドで病院に，祖母と曾祖母はまだ家の中という電話があったのはその日の昼頃だった。

両親と共に六甲道まで自転車で行く途中，ひっくり返った高速道路や，人と車であふれる国道二号線，破壊された建物を見てもまだ事の重大さが理解できていなかった。父方の実家と隣の家，その隣の家は完全に燃えてなくなっていた。この三軒は十年以上前からそこにあり，その姿がこんな風に変わり果てることなど考えたこともなかった。

祖父と会ったのは夕方頃のことである。肌の色は黒や焦げ茶色，一部皮がベロンとはがれて赤くなっている。髪，眉，まつ毛までも焼けてしまっていたが，この顔に眼鏡を掛ければまさに祖父の顔となる。しかし不覚にも，母が一目見て「アーおじいちゃんや」と言うまで私は気がつかなかった。

病院へはどんどん怪我人が運ばれてくる。うごめく怪我人，私服のままで走り回る医師と看護婦，車で怪我人を連れて来たが「もう連れて帰ってもいい」と言われて号泣する男性など，色々なものを見てしまった。

地震の前日まで私は風邪をひいており，コンコンと咳をする度に周囲の人が「大丈夫か」と気遣ってくれた。その日の夜，南の空に本物のオリオン座見えた。

二日後，祖父母が焼け跡から出てきた。祖母の遺体は自衛隊や機動隊の人が探してくれたがなかなか出てこなかった。機動隊の人が「全部焼けてしまって出てこないかも」と言った。父と叔父が翌日堀り出したからよかったものの，もし出てこなかったら一体どうなっていただろう。腕が干物のようになり，頭蓋骨が見えていた祖母の遺体を思い出しながらそう考える。

三人の遺体は三田で火葬した。予想だにしなかった原因で三人同時にあっという間，しかも，「これがかつて人間だったのだろうか」といいたくなる程ひどい姿だったので，身内を亡くした悲しさよりも驚きが先行して現在に至っている。

16）あたたかさ――神戸市立本山南中学校　2年5組　木原　真理子

私は地震のあと，すぐに家族と近くの公園へ行った。そこへは，他にもたくさんの人がいた。私達は本当に着のみ着のままという感じだったから，寒くて，お腹が空いてたまらなかった。しばらくすると，近所の人だと思われるおばさんがこちらに近寄って来た。なんだろうと思ってじっと見ていると，そのおばさんはニコッと笑って「寒いでしょう，はい。」と言って毛布とあめをくれた。初めて人のつながりの大切さを知って，近所の人のあたたかさを知った。

その後私たちは公園を出て，学校に行った。帰ってくる途中，又人のあたたかさに触れることができた。ちょうどその時私たちは，家に帰ろうかどうか迷っていたところだった。今から家をかたずけに帰るにも，また地震がくるかわからないし，公園にもどってもすることはないし，学校は避難所になってていっぱいだった。一体何処で寝ようかと途方に暮れていた。その時現れたのは，友達とそのお父さんだった。お母さんが事情を話すとその人は何度もうなずいた。その後，にっこり笑うと「それじゃあ，うちに来ませんか。3人位ならとめられますよ。」と言ってくれた。こんなみんな大変で，他の人にかまってられないときに，こんな嬉しいことを言ってくれる人がいるなんてと，とても感謝した。

「お言葉に甘えて」というふうに家に行くともう一家族来ていた。全員で14人ほど，子供も多く，一人っこだったので私にとっては毎日が戦争だった。

この地震を体験したことは，苦しみや悲しみばかりだったと思うけれど，学んだことは生きていくための，これからの人生のために大切なことばかりだと思う。

17）証言――神戸市立本山南中学校　神戸　美砂

1月17日，阪神・淡路大震災がありました。私は前の日に，40°C の熱を出していました。夜，ゴトッ，と音がしたので私は，小さい地震かと思い，またふとんを，かぶりました。その時，ゴトッゴトッ，ゴゴゴ……ゴオォンッと音がしました。それとほぼ，同時に大きな〃ゆれ〃がありました。私は，泣きながら両親を呼びました。でも〃ゆれ〃は，だんだん大きくなるばかり。私はベットの中で何か，つかむ物をさがしました。とりあえず，しきブトンをつかみました。洗たく機のようです。しばらくすると，だんだんゆれが，小さくなり，両親が

「みさーっ，せいやーっ。」

と呼んできたので，返事をすると，

「今行くー。」

と母の声，そのとき，ゴンッという音がしました。父が

「うっ」

と言っていましたが，母は，かまわずに台所に行き，ガスをとめました。そして，私たちの部屋に来て，私を，弟のベットにだっこしていき，母は，食器の山をこえて，ドアを開けようとしていました。でもドアは閉まったまま。そこで，母は，

「ふんっ」

と言って，ドアをけやぶりました。でもわたしは，みんなよりも，一番大切なメダカ30匹のほうが，気になり。

「ハヤさーん（メダカ30匹の名前）

と，とさけびながら，メダカのいる部屋に行こうとすると，ドアの前にタンスがあったので行けなくなりました。母は，メダカの事など気にせず，1人で外にでて，子供部屋の窓から，私たちを出しました。その時父は，タンスの下じきになっていて，母は，

「だれかー」

とさけんでいたけど私は，外がすごい火事だったので，ボーと見ていました。私と弟で前の父と，会社のホテルに行きました。長田から車で前の父が来てくれたのです。母と父は，公園で人を助けていたそうです。私がいたホテルも水不足で私と弟は，水くみ，父は会社です。3週間がたち，私たちはしんせきの所へ。4月になって私は，父や母のいる公園に行きました。父は，こっせつしていたそうです。メダカは，半分生きていたそうです。川にはなしたメダカは，今年だんだん多くなっています。7月には，うちにネコが来ました。震災でまよったらしいのです。名前は，チャンチャン君です。私と大の仲よしです。この子に会えたので，震災は少しよかったと思います。今の家には，チャンチャンと，2匹のネコがいます。私にとっ

て震災とは，とてもいい体験？だったかな？

18）はじめての地震――本山南小学校　5年1組
貞松　奈穂美

わたしは，地震とゆうのは，ただ少しゆれるだけだと思っていました。そして地震がおきる前の日，「これから早くおきようね」と言っていました。そして，「これからはやくおきよう」と思っていました。そして次の日の朝，地震がおきました。わたしは，まだ1年生で，何がなんだかよくわかりませんでした。そして，きがついたら，ピアノと，カバンや服をかけるのがわたしのうえにたおれていて，体がうごきませんでした。そして少したったら，お母さんとお父さんの声がきこえました。「だいじょうぶ」と言う声がきこえました。そしておねえちゃんが，「だいじょうぶ」とわたしよりさきに言いました。そしてわたしも返事しないといけないことをしっていたのに，なぜか声がでなかった。「どうしよう」と思った。そしてお父さんが，ピアノと服かけをのけてくれて，「だいじょうぶ」と言ってくれました。そしてわたしは，「うん！だいじょうぶ！」と言いました。そして，台所のテーブルがよこにたおれていて，それをお父さんがもとにもどして，わたしはまだ小さいのに，お母さんの服や，おねえちゃんのくつをはいて，そとにでました。そして外から見たら，わたしが住んでいたマンションが，少しかたむいていたのがわかりました。そして，おばあちゃんの家に行くことにしました。バスもなにもないからあるいていきました。わたしは，おばあちゃんの家までつく道がすごくこわかったです。なぜかと言うと，家やはしら，ビルなどがもうぐちゃぐちゃになっていて，それは，わたしがはじめて見る道でした。おねえちゃんのくつをはいていたから，少し大きくて，石やガラスが入ってきて，とちゅうで出しながらあるいていました。そしてやっとおばあちゃんの家について，おばあちゃんは，生きていました。そしていとこもきて，みんなでこれからどうするかを話しあいました。そして，わたしは，学校をかわり，わか山にいるひーおばあちゃんの家に少し（2ヶ月）いることにしました。そして，学校にもなれてあたらしい友達ができたと思ったら，地震がおさまったからかえると言って，前住んでいたおばあちゃんの家にひっこして，またあたらしい学校に行って，またあたらしい友達が，できたと思ったら，また，この本山南小学校に行って今またあたらしい友達ができてきました。今はもうこわくないけどその時は，すごくこわくてあの地震から今まで，すごく早くかんじます。

19）おじいちゃんを返して――高木小学校　5年2組
中西　彩

1月17日，あの大震災は起こった。ガッシャーン。ドシン。

次々と物が割れ，机も傷だらけで，お皿のかけらが次々と下に落ちていく。私は，こんな光景が初めてなので，何が起こったのか全くわかりませんでした。まず，ズボンをはいて，パジャマの上からジャンパーを着て，あわてて外に出ました。外にはたくさんの人が家から飛び出していました。

少したって，だいぶ落ち着いたので，家に戻ると，電話が鳴ったので，私がとりました。それは，おばあちゃんからでした。

「はい。中西です。」

「あっ，あやちゃん？いま，・・・おじいちゃんが・・・。」

「え？どうしたの。」

「実はね。おじいちゃんが家の下敷きになっているのよ。もしよかったらこっちにきてくれるかなあ。」

「・・・うん・・・。」

電話を切ると，涙があふれてきました。1番好きだったおじいちゃんが死ぬなんて。悲しくて悲しくて，おばあちゃんの家に行くのがどうしてもいやでした。

そんな私に，お母さんが言いました。

「きょうしかおじじと会えないのよ。最後なんだから顔ぐらい見なさい。」

私は自転車に乗り，おじいちゃんの家に向かいました。道で迷ったり，電信柱が倒れていたり，とても恐ろしかったです。そして，ついにおばあちゃんの待つ家に着きました。

そこには，頭から血を流し，とても悲惨な姿のおじいちゃんがいました。でも，そんな姿になっても，私にとっては，いつもと同じ優しい「おじじ」でした。

地震は，わたしたちからいろいろなものを奪っていきました。他のものは作り直せたけど，人の命は元には戻りません。3年たった今でも，思っています。

おじいちゃんを返して。

20）私の証言――神戸市立本山南中学校　2年5組
薮越　慶子

寒い日でした。まだ，神戸の町が眠りについていたころ，あの震災は起こりました。私はまだ，小学校4年生で，夢の中でした。ぼんやりとした意識の中で，「ゆれ」とも呼べない，かすかな，かすかな振動を感じたその時，あっと思う間もなく，私は部屋ごと，いえ，地面ごと振り回されていました。それが地震であることも，夢なのか現実なのかも分かりませんでした。ただとっさにいつもまくらもとに置いていたぬいぐるみをだきしめてふとんにもぐることしか，頭には浮かばなかったんです。こわかった。その一言に尽きます。心臓を冷たい手でぎゅっとつかまれたように，体が動きませんでした。ゆれがおさまった時も，私は，目を開けられませんでした。自分が無意識に，目をかたく閉じてしまっていることすら分からず，自分が作りだした闇の中で，ひたすら恐怖から逃げていま

した。目を開けて，何がどうなったのか知りたい，心ではそう思っているのに，体はひきつったように動いてくれませんでした。失明したんだろうかと，バカな事を考え始めた時，だきしめていたぬいぐるみ，テディベアのやわらかな手ざわりが伝わってきました。すっと，心のカギがはずれたかのように，何かが軽くなった気がして，私は目を開けました。

その後，私の家族は，近くに住んでいる祖父と祖母の家へ行き，しばらくして，私は奈良の母の友人の所へ疎開しました。全然さみしくなかったと言えばウソになりますが，もともとホームシックなど無縁な子だったし，何より，学校が恋しくてなりませんでした。なぜこんなに学校に行きたかったのかは，私にも分かりません。でも，友達と笑いあえる喜び，誰かそばにいてくれることの大切さ，心強さを，私は知ったような気がします。

私の証言というか震災の記憶は断片的なものばかりです。止まった時計，川のようになった道路，ガスもれのにおい，火花を散らしながらたれさがった電線，粘土細工のようにつぶれた家，地面に走ったひび，そして，どろりと赤黒く，地面に流れた血・・・数えあげればきりがありませんが，心をえぐるような光景でした。でも，私には友達がいます。奈良で，神戸で，その他行く先々で，人の出会いは待っています。まだ神戸は立ちなおっていない，よくそんな言葉を聞きます。確かに，心の傷を抱えている人は，たくさんいるでしょう。でも，心の傷は，心の痛みは，みんなで分け合うことができます。私は胸を張って言いたいのです・・・WE LOVE KOBE・・・と。ここは，私達の町，神戸なのだ，と。

21）私の体験団――伊丹市立伊丹高校　1年7組（商業科）　中村　つかさ

本当は平凡で穏やかな朝で一日が始まるはずだった。まさかあんな恐怖で一日が始まるなんて誰も想像してなかった事がついに夢ではなく現実におきてしまった。

あの時私は12才小学6年生。前日から風邪ぎみだった私はピークに達していた。16日の夜，せきがとまらず少し体がだるい事もあって，母と「明日学校を休んで病院に行こうね。」と約束をして，普段よりかなり早めにねむりについた。けど熱もあがってきたせいか，なかなかねむれず同じ部屋でねていた姉に何回か「しんどい」と言ったことを覚えている。けど4時半頃もうだめだと思い別にねていた父母の部屋に私は向った。その時熱は39度まで上がっていたのでその日は母の布団で一緒にねることになった。そのせいで父をおこしてしまい最初は悪い事をしたと思っていた。父は，その後もねれずリビングでテレビを見ていた。しかしそれがいずれおこるあの恐怖に対して生命の糸をつなげる一歩となった。そしてついに5時46分になってしまった。

「ガチャンバリバリバリ」こんな音で始まった悪夢の時間。私のねていた父母の部屋には，タンスに鏡，何十冊と入っていた本棚があった。その本棚の下には，本当は父がねているはずだった。しかし父は，私がおこしてしまった事でリビングでテレビを見ていたのである。あの時私達一家は，マンションの9階に住んでいた。だからかなりの激しいゆれだった。ゆれが一時おさまり，姉の叫び声が聞こえた。「お母さんつかさがベッドにいない」そんな言葉だった。姉の母の会話が続き家族全員生きてる事を確認した。外ではすでに，近所の人の話し声が聞こえた。急いで避難している様子がうかがえた。私達も避難しなければならない。しかし家のドアがゆがんでしまいドアがびくともしない。けど父は決してあわてる事はなくとても冷静だった。幸いにも姉がろうかの人に助けを求め，外からドアをおしてもらい無事に避難する事ができた。少したってから近くに住んでる祖母のあんぴを確めるために父と姉が自転車で祖母の家に向った。幸いにもお皿などがわれただけで，祖母は元気だったという。私の熱が高いという事もあって，父は一度マンションに帰ってきたあとで私と母は祖母の家に行き避難した。私はその生活があたりまえだと思っていた。いつも通りごはんを食べて，いつも通りあたたかい布団でねて，ごはんも十分にとれずあたたかくねれる場所のない人がいるという事を考えた事があんまりなかった。だけど事の重大さは理解していた。多くの人がこまっている事や多くの人がなくなった事など…。4年たった今でも多くの傷が残っている街で必死で生きている人がいる。同じ経験をした人間として苦しい生活，さみしい生活を送っている人の事を決して忘れては，いけないと思う。

22）私の証言――神戸工業高等学校　1年　飯田　直樹

その日は熱がでていて，なかなかねむれなかった。夜中に何回も目が覚めて，ねると必ず頭の中でヘンな場面が，何度もくり返しめぐりそれが気持ち悪くて目が覚めたりもした。4時半ぐらいに一度薬を飲みに台所にいって薬をさがしていたら親が来て，「どないしたん？」と，言ったので，鼻づまりの声で「なんかねられへん。」といい，薬を出してもらって，それを飲み，部屋にもどり上に弟のねている二段ベットに入りねた。目をつぶるとあいかわらず気持ち悪い場面，例えば，つぶれた家から手が出たりしているのがあって，やっと少しねむったかなという状態になったけどまだ意識がかすかにあって，しばらくすると，トイレにいこうかなとか思い出して起きようとしたときに体がゆさぶられたような感じがした。なんでこんな起こしかたするんかなと思い目を開けると自分と弟の勉強づくえがかたむいて，まるでおどっているかのように

はねまわっていて，1，2秒ぐらいたってから，うわっ，これって地震やと思い，ベットが分かれるタイプなので必死で支えていたけどやっぱり落ちてきて思いきり上から弟ごとのっかってきた。うごけなかったので弟に，「はよどけや，重たいねんや。」と，キレてなんとかぬけだすと今度はくずれた部屋のものでドアが開かずとりあえず，つかんでほり投げてドアを開けて，ろうかに出た。むこうの部屋に親たちがねてたので，いこうとすると2m50cm ぐらいはなれた所にある洗たく機の中の洗たく物が飛び出していて，足がびしょびしょになった。そのときにトイレに行きたかったことを思い出してトイレにいこうとすると，トイレの前にある洗たく機とかんそう機が重なっているのが前に倒れこんでいてまっくらなので，気づかず頭を思い切りぶつけてしまい，どけてトイレに入った。そのあと，げんかんを開けて外に出て，おとなりの人も出ていたので声をかけあい，無事なことを知って一面ほこり立っている景色を見ると急に我にかえったように落ちついた。すると非常ベルがなりひびき壁にひびが入っていてすげーと思っていた。家族が全員外に出て小学校にいくと友達が何人かいて，大丈夫かなどということをいって，しばらくだまって立っていると急に熱とねむたさでへたりこんでしまった。南を見ると菅原市場が火事で，消化器をもった大人の人が走って向かっていた。そのあと加古川に住んでいるいとこのおっちゃんが車で来てそれにのって，加古川に行き，次の日電車でいこうとするとすごくおそくて，神戸まで1時間もかかった。そこで友達に1人5年生の子が家の下じきになって死んだと聞いて，ショックだった。そのあと小学校の卒業式などをすませて落ちつき，加古川で3年間住み今にいたっている。地震によって失うものもあったけど，それにより得たいろんなものもあった。それらをこれからも大事にしたいと思う。

23)「阪神・淡路大震災」——朝霧小学校　3年
堤　優花

私がまだ5才のころ，家族みんなで夕食を食べていました。するとグラグラと小さなゆれがきた。しん度1だ。なにもなかったように時間がすぎた。するとおかあさんが「これはもうすぐ大きなじしんがくるよこくかもしれないよ。」と，言った。

その夜，私はベットに入ったいつも通りに。おにいちゃんも上のベットでねている。でも今日はなんだかちがう。なぜだろう。し～んとしていて夜風がつめたいし…。

私はこの日はめずらしくすごくこわいゆめを見ていた。うなされているようだ。「はっ。」とつぜん目がさめたら体中あせびっしょり。

こわかった。暗くて回りがよく見えない。私は1人では心ぼそくておとうさんとおかあさんがねている部屋へいくことにした。「でも部屋まで行くにはろうかをわたらなければならない。」私はいっせーのーでっで，くらいろうかをわたった。おとうさんとおかあさんのすがたがみえてやっとほっとした。

おかあさんのふとんにもぐりこんだ。また，し～んとしてきた。

その時，ガッチャーンバリバリガタガターすごい音だ。なにごとかと思えば家がグラグラ強くゆれている。その時私はどうしようかと思った。ゆめよりこわいげんじつだから。「優花！うごいちゃだめよあぶないから。」

おとうさんとおかあさんが起きた。しょっきだなや本，ガラス，金物。色々な物がくずれおちるのをはっきりとこの目で見た。

ようやくじしんが止まった。でもなにかわすれているよう気がした。「そうだ！おにいちゃんが子ども部屋にとりのこされている。」私は思い出した。おとうさんがそのことに気がついた。「のぶ！じっとしてろよ。今，たすけに行くからな！。」おとうさんがもどってきた時のおにいちゃんはガタガタふるえていた。

そのあと子ども部屋を見てみるとなんだかうちじゃないようにあれていた。テレビはたおれ，つくえの上の物はおち，ガラスの電気がおちていた。

おにいちゃんはたすかったが，じしんがおきた時こわかっただろうな。暗い所で…。

ニュースでもひがいをたくさんの人がうけたと聞いた。じしんがおきてから何日間も，「阪神・大震災」のテレビばかりだった。全国で家がやけくずれ，何千人もの人がなくなったそうだ。もちろん明石でも何人か…。でも私はきせきてきにたすかったと言える。なぜかと言うとこわいゆめを見ていなくてあのままべっとでねていたら電気が私の上におちてきてテレビの下じきななって死んでいたかもしれない。あまり物のないおとうさんとおかあさんがいる部屋に行っていて本当によかったな。と思った。たしかに阪神淡路大震災を体験したということをしょうめいする。

24)　1月17日の悲劇——神戸市立本山南中学校　1年
1組21番　島田　信幸

「ガタガタ。」

ぼくは，この音で目を覚ました。「なんだ。また地震か。早くおさまってくれないかな。」と，いつもいままでと同じ地震だと思っていたのに，今回は，まったく別だった。「ドスン」何かが倒れる音がした。

「もしかすると…。」

ぼくは，少し前に，北海道で地震があったニュースをたまたま見ていて，地面が割れているのを見た。ぼくは，その時「へぇ，地震ってこわいんだぁ。」と感じたばかりでした。「グラグラ。」

だんだん家がゆれてきた。外では犬がほえている。本だなが倒れ，ガラスが割れ，当時小3であったぼくでも，「あっ，えらいことになるぞ。」と感じたぐらい

ですから，大人の人ならどうでしょうか。もっと大変なことになるということを感じたんだと思います。

だんだんとゆれがすごくなってきました。これは，言葉にも表現できないくらいすごい音でした。ぼくは，当時小５の姉と言い合いました。

「お姉ちゃんこわいね。」

「ほんまにこわいね。」

「ぼくらこのまま死んじゃうのかな。」

「ほんまやな。死んでまうかもしれへんな。」

地震がやみ，ほっとする間もなく，２回目がきました。

「あ，またきた。」

今度の地震は，１回目とは，ちがって，もっとゆれがはげしくなってくる。

「もう終わりだ。死んじゃう。」

と思った時ゆれがおさまった。

生きていてよかったと思いながら周りをみると，家の中がぐちゃぐちゃになっていた。　外に出てみるとすごい人数の人達が道に立っていた。周りの家は，つぶれていたりしていたのに僕の家は，何もなかった。すごくラッキーだった。しかし，全かいしたところなどでは，生き埋めになった人達の救出作業をしているところも見た。

いろいろ見てきたけど一番つらかったのが死体だった。そのほかにぼくは，いろいろなことを避難したところで言われつづけた。

最後にぼくが地震で感じたことは，「地震で失うものは，いっぱいあったけれど得たものは，あったのかな。」

ぼくは，それが，未だわかりません。

25)「大地震」――神戸市立本山南中学校　１年４組　39番　浜田　妙美

私は，４年前のあの出来事が今でも心に焼きついています。私の人生を変えるような出来事…。４年前の１月17日悲劇は起こった。何千にもの死者を出した怖い体験。私は，大地震が来るなんて思ってもいなかった。１月に入って北海道での地震が多くなってテレビなどでも，よくやっていた。まさか，神戸に大地震が来るなんて誰も予想しなかっただろう。１月17日午前6時46分私は，心臓が止まりそうになった。ゴドゴトと家が大きく揺れている中お母さんが，

「地震よ，ふとんをかぶりなさい！！」

と必死に言っているのが聞こえた。ほんの十数秒の間に私は身動きがとれない状態になった。十数秒たって地震がおさまった時，体が動かなかった。私は，そこで初めて家の下じきになっている事が分かった。すごく，ほこり臭くて，せきがすごく出た。私の家族も，タンスの下じきになっていたりしたようだ。１時間30分も家の下じきになった。下じきになっている間，いろんな事を考えた。死んじゃうのかなと思った。すごく，家族の事が心配だった。１時間40分ぐらいたって，やっと助け出された。外に出た時，すごく暗かった。お母さんが泣きながら，ギュと抱きしめてくれた。私は，その時まで泣かなかったのに，ホッとしたせいか泣きました。家族も全員，無事だった。辺りを見てみるとビックリしてこしがぬけそうになった。昨日までの，風景とは全然ちがった。家が全部つぶれていて，建っている家なんてなかった。近所のおばちゃんが，助けて，助けてとさけんでいるのが聞こえた。私の近所でも何十人という人が亡った。空き地に，何人もの遺体が置かれていた。私は，こんな状態を見て，これから神戸はどうなっていくんだろう。と不安だった。何日かして，小学校に行った。私達の学年では３人。全学年では６人の友達が亡った。

あれから，４年がたち，私は５回も引っ越しをした。この震災で私はいろんな事を学んだ。友達の大切さ，命の尊さ，地域の人のやさしさ，家族がどんなに大切かなど，いろいろ教わった。多分，地震が来なかったらこんな体験はできなかっただろうなと思う。失ったものは多いけど，反対に教わった事も多いと思う。これから，生きていく中でいろいろ苦しい事もいっぱいあると思うけど，命は大切にしようと思う。亡った友達の分まで頑張って生きていこうと思う。

26) ４年前の阪神・淡路大震災の体験――神戸市立本山南中学校　１年３組　相馬　和枝

1995年１月17日５時46分頃，ドドーンという音と共に，大きな横揺れが起きました。お父さんに起こされ周りを見ると，お父さんは，タンスを両手で支えて弟を守り，母は私の上におおいかぶさっていました。良く見ると，母の体の上には，タンスが倒れてウンウンとうなりながら，私に早く逃げる様に言っていました。お兄ちゃんは，幸いにして何も荷物が無い所にいたので，無事にケガもせずに済みました。私を助けて来れた母は，胸の骨を折りながらも家族全員で痛みをこらえて，必死に本山南小学校へ避難しました。周りはガラスが臭い。２階の家が１階になっていたり，ケガをした人達や亡くなった人も大勢いました。お父さんは，おじいちゃんの家に行く途中，あっちこっちの家が，バラバラに崩れていて，助けを求めていた人もいたとの事でした。おじいちゃんの家は無事でしたが，私の家に，泊まりに来ていた正夫おじさんも，頭にケガをし，胸のあばら骨を折っていました。町は逃げまどい，電気や水も出なくて，洗濯はプールの水を使い，飲み水は自衛隊の人達が運んで来てくれました。最初は１個のオニギリを５人で少しずつ食べました。何日かしてから，ボランティアの人達が来て，食べ物を作ってくれたり，衣服等も配って下さったので，皆さん，大助かりでした。私と兄と弟はボランティアに参加して，お手伝いをしました。父と母は，はん長をして，色々な相談に乗ったり，食べ物を運んだ

りと大忙しの毎日でした。特にトイレ掃除が大変でした。私の家は，全壊して，東加古川の仮設へ移り住む事になりました。仲々慣れませんでしたが，ボランティアの人や，色々な人達とめぐり会い，ラジオ体操や，色々な催し等にも参加しながら，交流を深めました。東加古川は自然が沢山有り，周りは田や畑，仮設の近くには駅や飲食店，スーパーも有りとっても便利な所でした。春には田植え，秋には稲刈り，仮設の人も野菜を夏休みには，ザリガニやヤゴを取ったり，イチヂクを取ったりと色々楽しむ事が出来ましたが，神戸に帰る日が決まり，元の第1住宅に戻って見ると余りの自然の少なさにびっくりしました。仮設に残っている人の事を思うと心苦しいですが，いざ帰って見ると，東加古川の事を思い出したりする事も有りました。今では落ち着きを取り戻しました。震災の時の見知らぬ人との出会いや交流は一生，忘れる事は無いと思います。もう2度とあの時の様な震災やまた，恐い体験はしたく無いと思いますが，全国各地で震災や水害に会った人達のテレビを見る度に，思い出し，人事の様に思えず，テレビを見入っています。震災で家が全壊した人，又は，水害で家を流された人達，どうぞ1日も早く復興することを祈っています。

2.4 巨大災害研究センター（DRS）セミナーの開催

当センターの専任・客員教官，非常勤講師，研究担当教官，運営協議会委員および適宜招聘した講演者によるオープンセミナーの形で，1997年度より月一回の頻度で開催している。1998年度の講演者と，講演題目は次の通りである。

第1回（5月7日）
私の考える防災学
河田惠昭（巨大災害研究センター教授）
地域防災計画の高度情報化
林　春男（巨大災害研究センター教授）

第2回（6月5日）
都市計画における地震危険度評価
—中国雲南省麗江県の例
赤松純平（巨大災害研究センター助教授）
途上国に対する防災援助の限界
渡辺正幸（巨大災害研究センター非常勤講師・国際協力事業団）

第3回（7月3日）
津波による土砂移動
高橋智幸（巨大災害研究センター助手）
日本人の防災意識の変化—自助・扶助から公助へ—
笹本正治（巨大災害研究センター客員教授・信州大学人文学部教授）

第4回（9月9日）
サンフランシスコ・ベイエリア周辺の活断層と地震発生　西上欽也（巨大災害研究センター助教授）

第5回（10月2日）
地震火災による被害の予測評価に関する研究課題
田中哮義（巨大災害研究センター教授）
長江中流域における洪水とその被害
高橋　学（巨大災害研究センター非常勤講師・立命館大学理工学部教授）

第6回（11月6日）
防災情報システムの課題
亀田弘行（京都大学防災研究所教授）
防災投資評価の基礎的考え方
上田孝行（岐阜大学工学部助教授）

第7回（12月4日）
災害後の災害について
広瀬弘忠（巨大災害研究センター客員教授・東京女子大学文理学部教授）
都市建築物群の地震被害予測の現状
北原昭男（巨大災害研究センター助手）

第8回（1月11日）
非地震性の津波について
今村文彦（巨大災害研究センター客員助教授・東北大学工学研究科助教授）
災害情報とCGコンピュータ
上野弘道（巨大災害研究センター客員助教授・鹿島建設技術研究所）

第9回（2月5日）
地震と情報
廣井　脩（巨大災害研究センター運営協議会委員・東京大学社会情報研究所教授）
建築物のための設計用模擬地震動について
井上　豊（巨大災害研究センター運営協議会委員・大阪大学工学研究科教授）

第10回（3月5日）
ため池の防災　内田和子（岡山大学文学部教授）
衛星レーダに写る地球の表情と災害
木村　宏（岐阜大学工学部助教授）

3. データベース“SAIGAI”

3.1 背景

巨大災害研究センターでは，その前進である旧防災科学資料センターの設立当初より，国内における災害史資料の収集・解析を行い，これらの資料をもとに比較災害研究，防災・減災などに関する研究を実施してきた。これらの実績を踏まえて，1982年度よりデータベース“SAIGAIKS”を構築し，旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物を登録してきた。この“SAIGAIKS”は，1988年度に科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース“SAIGAI”として拡充された。現在，本センターを中核として，全国各地区資料センター（北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学

・九州大学）の協力のもとでその構築作業が継続されている。登録されているデータは，1998年4月現在で約6万件に達している。文献検索に資するため，1983年に科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された。さらに1994年には，キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された。

3.2 新データベースシステムの導入と利用状況

データベース“SAIGAI”の検索サービスは，1990年3月より京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行しており，大学間ネットワーク（N1システム）に加入している大学であれば，日本語端末を用いて資料の検索が可能であった。しかし，最近の情報通信環境の発展にともないワークステーションやパーソナルコンピュータを用いた検索が増えており，より直感的な検索システムの導入に対する要望が強くなっていた。すなわち，従来のコマンドを主体としたキャラクター・ユーザー・インターフェース（CUI）ではなく，webサービスなどを利用したより操作性の高いグラフィカル・ユーザー・インターフェース（GUI）による検索方法の実現が期待された。

このような要望を受け，1998年度における巨大災害研究センターのホストコンピュータ更新では，グラッフィクス処理能力の極めて高いシリコングラフィックス社製 Onyx2 を中心としたデータベースシステムを導入した。本システムでは，データベース・アプリケーションとして，多くの実績があるオラクル社製 Oracle を採用し，今後の CD-ROM や Video による災害関連の情報，また数値地図や統計資料などのディジタル情報への対応も配慮した。

新検索システムは WWW 上に構築されており，各ユーザーはパーソナルコンピュータなどのブラウザから自由にアクセスが可能となっている。また，検索方法についても改良を行い，キーワードおよびシソーラスを用いた検索を実現している。なお，データベース“SAIGAI”には，巨大災害研究センターのホームページ（www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp）からリンクがはられている。

新システムへ完全移行して約1年が経過した。従来の CUI による検索システムも並行にサービスを行っているが，利用者は WWW への移行が進んだ。それに合わせて，新システムへの問い合わせも多数寄せられ，グラフィカルに検索ができるため，直感的で分かりやすいという意見が得られている。同時に以下のような要望も寄せられた。

- サーバーが高負荷になっており，アクセスに時間のかかる場合がある。
- シソーラス検索とキーワード検索の連携が悪い。

これらを今後の課題とし，より使いやすいデータベースシステムへ改良を行っていく予定である。

4. あとがき

巨大災害研究センターでは，研究成果が目に見える形で社会の役に立つことを願って，ここで示したようないろいろな試みを積極的に実施してきた。ここで紹介したほかにも日本自然災害学会の事務局機能を支援してきたことや，所員による地域防災計画や被害想定に関係した国，地方自治体の委員会活動，防災講演会での講演，大規模災害対策セミナーなど各種セミナーの開催や運営，突発災害調査への参加など，多くの努力を重ねてきた。その一端が本報告に紹介されており，第三者のご批判に耐えられる研究活動を継続したいと考えている。

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (26)

Yoshiaki KAWATA, Takeyoshi TANAKA, Haruo HAYASHI, Akio KITAHARA
and Tomoyuki TAKAHASHI

Synopsis

The objectives of this paper are to show the activities of the Research Center for Disaster Reduction Systems in 1998. They include some approaches to contribute to disaster loss reduction. Memorial Conference in Kobe has been held to exchange and have disaster lessons in the Hanshin-Awaji earthquake disaster. Establishment of Seattle Annex will contribute to the earthquake and tsunami loss reduction in the U.S. as well as in Japan. Research Association for Toukai, Tou-Nankai and Nankai Earthquake Tsunami focus on some problems in accompany with next these earthquake tsunami disasters. Seminar for disaster loss reduction due to climate hazards is opened to train local government officers in the disaster prevention section. Other activities such as committee members of disaster planning and disaster loss estimation in central and local government level and promotion of some symposiums and forums will also contribute to improve our research accountability.

Keywords: database, natural disaster science, catastrophic disaster, Seattle Annex